詩の朗読と音楽と　～詩人・金 時鐘をゲストに～

境界に立ちのぼる歌――金時鐘と「ソシエテ・コントル・レタ」　守中高明（詩人）

〈CD『ソシエテ with 金時鐘』ライナーノーツより抜粋〉

⏭（…前略）詩人・金時鐘と港大尋率いる「ソシエテ・コントル・レタ」との出会い――この出来事を聴き分けるために、私たちはどのような耳を持てばよいのだろう。一方に、在日朝鮮人一世としてこの国の戦後の時間と空間をくぐり抜け、東北アジアの歴史を半世紀以上にわたって証言し続けてきた孤高の詩人がおり、他方に1960年代後半生まれの日本人からなる、既成のいかなるジャンルにも属さぬ独自の音楽を追求するバンドがいる。なるほど、これは異質なものどうしの出会い、大きな隔たりをはらんだセッションであるかにも見える。三六年間におよぶ植民地支配の、そしてその帰結としての祖国分断の記憶を一瞬たりとも手放したことのない七三歳の詩人と、旧宗主国の戦後第三世代に属し、戦争の記憶から遠く離れた場所を生きるミュージシャンたちとのあいだには、いかなる意味でも共通項などありはしないと想定されるかも知れない。だがしかし、この日、2002年10月9日／10日、彼らは出会った。そして、そこには、稀有の場が、この語の最も単純で力強い意味における「コミュニケーション」が出現した。

金時鐘の詩作の本質を一言で要約するなら、それは「異語としての日本語」の産出にある。かつての「皇民化」教育によって、存在の根底を形づくる母語を幼年期に奪われ、以来、いかなる言語をも自己固有の言語として生きる可能性を奪われて、今日に至るまで、言語的追放を強いられ続けた故郷なき詩人。その言葉は、しかし、それゆえにこそ、圧倒的な力を持つ。他者の言語、それも、かつての支配者－収奪者の言語を通してみずからを表現する道を選んだ詩人のもとで、日本語は、その自然性の幻想を剥ぎ取られる。民族の受難を、「在日」という被抑圧者の生を、統一されるべき祖国への祈りを詩人は書き続ける。だがそれは、あくまでも支配者の言語、メジャーな言語の資源を用いてである。排除されかねない者がマジョリティの言語を意図的に使うことで、メジャーな言語の内部に穿たれる亀裂。その結果、メジャーな言語たる日本語が、その虚構の単一性と均質性から、多様な力と異質な存在がせめぎ合い軋み合うリアルな場へと目覚めることを強いられるのだ。

「ソシエテ・コントル・レタ」（＝「国家に抗する社会」）が金時鐘と出会うのは、この地点である。港大尋とその仲間たちは、すでに前作『ありったけのダイナシ』において、詩人と同じ作業を十全に展開していた。「ソシエテ・コントル・レタ」の音楽は、ジャズであり、ファンクであり、ラップであり、現代音楽であり、民族音楽であり、かつ、そのいずれでもない。たしかに、「ソシエテ・コントル・レタ」の音楽はさまざまな引用からなっている。だがそれは、自己の出自や帰属を示す無償の目配せなどではない。そうではなく、「ソシエテ・コントル・レタ」は、既存のジャンルとその文法を受け容れ、援用するかような身ぶりをしつつ、実のところ、その文法の中に無数の小さな違和を打ち込み、メジャーな文法が完成するのをつねに妨げ、遅延させる。あらゆる予定調和に抗うディスコード。実際、澤和幸のギターが和音分解をするとき、そのきわめて精緻な構造の中には、きまって終結の夢を回避し、潰えさせる動物的な本能が潜んでいるのだし、村上和正のベースが走り、清水達生のドラムとともにたがいを牽引し合いながら出現させるのは、けっして〈1〉の反復に還元されることなく、また、たんなる変拍子に還元されることもない複数化するリズム系列である。そして、港大尋のピアノ――それはいつだって肌の粒立つような至高の抒情の到来を予感させつつ、しかし、つぎの瞬間には暴力的な音列の洪水によって、私たちの耳を開いたままにする。ここにあるのはつねに、メジャーなるものの挫折と脱臼、つねに維持される積極的な分裂なのである。

この音楽空間こそは、人が他者と出合うことを可能にする空間だ。金時鐘を迎えるために、「ソシエテ・コントル・レタ」は、その原理を全面的に解放した。「おぼつかない発音の日本語」で（だが、その響きはこの国のどの現代詩人よりも正確なもの、実存をまっすぐに伝えてくるこのうえなく正確なものだ）詩人が深い陰翳をおびた声を発するとき、港大尋とその仲間たちは、いかなる調和をも拒んだ、そして、それゆえに出来る本物の複数性によって応答する。控えめな、しかし、留保なき歓待の場の形成である。

（…中略）

ここ――この時間と空間を分け持つこと。あらゆるメジャーなるものの保障から離れることによってのみ獲得さる、単独者たちのコミュニケーションへと参入すること。

それこそが、この夜の出来事が私たちに差し出すメッセージであるだろう。（…後略）⏮

風は海の深い溜息から洩れる

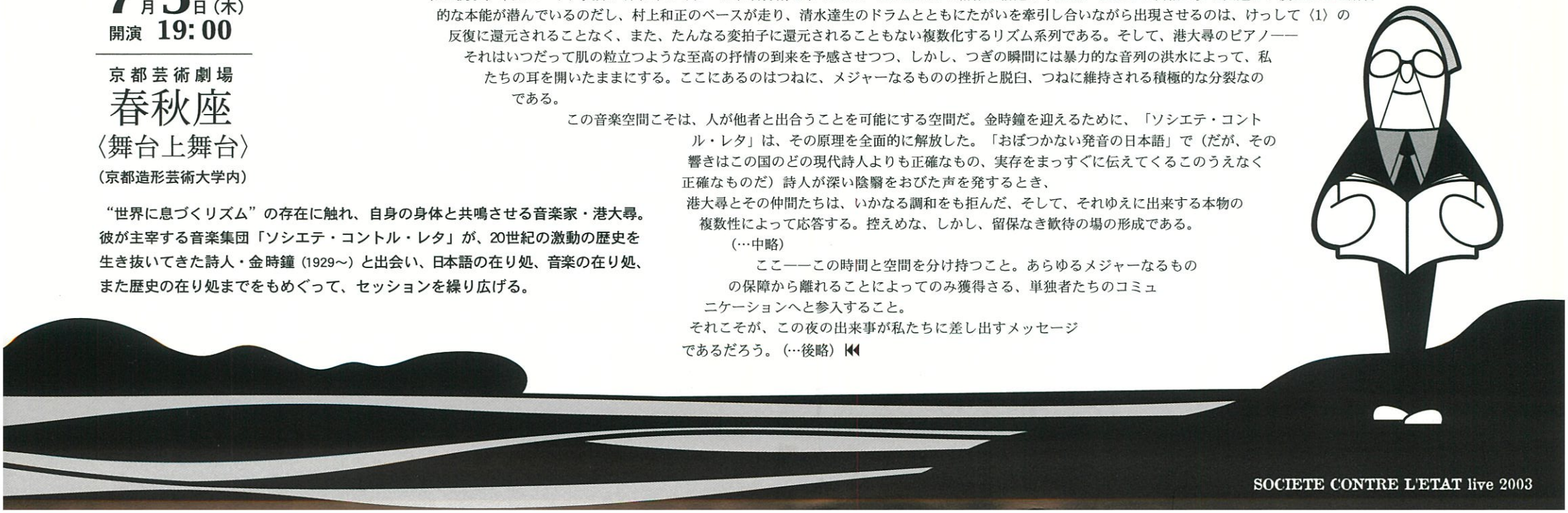
SOCIETE CONTRE L'ETAT avec 金 時鐘

出演 ▶ 金 時鐘（詩の朗読） ▶ 細見 和之（詩の朗読） ▶ 「ソシエテ・コントル・レタ」 / 港 大尋 / 澤 和幸 / 村上 和正 / 清水 達生

2003年
7月3日（木）
開演 19:00

京都芸術劇場
春秋座
〈舞台上舞台〉
（京都造形芸術大学内）

“世界に息づくリズム”の存在に触れ、自身の身体と共鳴させる音楽家・港大尋。彼が主宰する音楽集団「ソシエテ・コントル・レタ」が、20世紀の激動の歴史を生き抜いてきた詩人・金時鐘（1929～）と出会い、日本語の在り処、音楽の在り処、また歴史の在り処までをもめぐって、セッションを繰り広げる。



風は海の深い溜息から洩れる

SOCIETE CONTRE L'ETAT avec 金 時鐘

●日時　2003年7月3日（木）19:00 開演（18:30 開場）

●会場　京都芸術劇場 春秋座〈舞台上舞台〉（京都造形芸術大学内）　TEL:075-791-8240

●料金　［前売］一般2,500円／学生2,000円　［当日］一般3,000円／学生2,500円

※出演者とのフリートーク有り

●前売取扱

舞台芸術研究センター事務所

◎TEL：075-791-9437

◎E-mail：info@k-pac.org

●お問い合わせ

京都造形芸術大学　舞台芸術研究センター

◎〒606-8271
京都市左京区北白川瓜生山2－116

◎TEL：075-791-9437　◎FAX：075-791-9438

◎E-mail：info@k-pac.org

企画：港 大尋、ソシエテ＋金 時鐘ライブ実行委員会

主催：京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター　Kyoto Performing Arts Center

アクセス

◎JR「京都」駅／京阪「三条」駅／阪急「河原町」駅から（京都駅からは約5分）
→京都市バス5番「岩倉」行き乗車
「上終町・京都造形芸大前」下車

◎市営地下鉄「丸太町」「北大路」駅から（約15分）
→京都市バス204循環に乗車「上終町・京都造形芸大前」下車

◎京阪電鉄「出町柳」駅から
→叡山電鉄に乗り換え、「茶山」駅下車
徒歩　10分
→タクシーで10分

駐車場はございません。

名古屋・神戸会場
公演のお知らせ

7月 2日（水）
愛知芸術文化センター B 2F 中リハーサル室
●問= tel: 080-3618-0874
（ソシエテ＋金時鐘ライブ実行委員会／森）

7月 4日（金）
［神戸ライブスポット］ビッグアップル
●問= tel & fax：078-251-7049
（ビッグアップル）

出演者プロフィール

Kim Shijong

金 時鐘（朗読）

詩人。1929年、朝鮮・元山市生まれ。済州島で育つ。48年の「済州島4・3事件」に係わり来日。50年頃から日本語による詩作を始める。在日朝鮮人団体の文化関係の常任活動を行いながら、53年に詩誌『ヂンダレ』を創刊し、鄭仁、梁石日らと在日朝鮮人の関西における文学活動の中心的役割を担う。

詩集に『猪飼野詩集』（78年）、『光州詩片』（83年）など。集成詩集『原野の詩』（91年、小熊秀雄賞特別賞受賞）、『化石の夏』（98年）。エッセイ集に『クレメンタインの歌』（80年）、『「在日」のはざまで』（86年、毎日出版文化賞受賞）、『草むらの時』（97年）など。

Hosomi Kazuyuki

細見 和之（朗読）

1962年兵庫県生まれ。91年 大阪大学大学院人間科学研究科博士課程修了。現在 大阪府立大学講師。専攻、ドイツ思想。詩集に『バイエルの博物誌』（書肆山田、95年）、『言葉の岸』（思潮社、01年）。その他の著書に『アドルノ』（講談社、96年）、『アイデンティティ／他者性』（岩波書店、99年）など。85年に大阪文学学校に入学し、金時鐘氏と出会う。現在、雑誌「纜」「リリック・ジャングル」「紙子」「庭園」に所属し、「ホッチキス」をめぐる連作詩を執筆中。

ソシエテ・コントル・レタ

港 大尋（ピアノ、サックス、他）

Minato Ohiro

バンド、「ソシエテ・コントル・レタ」を率いて、演奏・作曲、詩人とのコラボレーションなど、幅広く活動する。アマラ・カマラとのコラボレーション、豊島重之主宰のモレキュラー・シアターへの参加。オーボエの茂木大輔のための作・編曲、マリンバの通崎睦美のための作・編曲、演奏などの活動。CDにソシエテの1st「ありったけのダイナシ」、「届くことのない12通の手紙」（マリンバ作品集）、林光作品を中心に収めた、竹田恵子との「ギョーザの夢」など。また、小中学校やろう学校などでのワークショップ形式のライブ活動を積極的に行う。最新作CDに「ソシエテ with 金時鐘」。

澤 和幸（ギター）

Sawa Kazuyuki

1965年愛媛県生まれ。義務教育における音楽授業では5段階評価の「2」を毎回記録。鼓笛隊などでは「澤君は音を出さないで、リコーダーを吹く真似だけをするように」と指導を受ける。79年頃からバンド活動を開始する。多摩美術大学卒業後は、音楽専門誌「ジャズライフ」の編集部に在籍しながら、ブルース、ファンク、ジャズなどブラック・ミュージックやアバンギャルド系のバンドで活動し、自己の音楽を追求する。浅川マキのステージや、抽象画家トム・レイルズとのセッションに参加。現在ではフリーとなり、荒巻茂生(b)の「ARAMAKI BAND」他で活動中。

村上 和正（ベース）

Murakami Kazumasa

1967年熊本県生まれ。高校卒業後上京し、メザーハウスで音楽を学ぶ。そこで恩師であるパーカッショニストの今村裕司氏と出会い、ラテンやジャズなどのリズムの奥深さを知る。以後、ポップス、ロック、レゲエ、ファンク、ジャズ、プログレと、あらゆるジャンルに活動を拡げる。現在「ソラリズム」、「ポメラニアンズ」他で活動中。また、毎年東京都杉並区で行われる高円寺阿波踊りに「美踊連」の一員として参加、お囃子のリーダーを務める。自称“狂い咲きベーシスト”。

清水達生（ドラムス、パーカッション）

Shimizu Tatsuo

1967年香川県生まれ。上京後、古澤良治郎氏に師事。ジャズ、R&B、様々なワールド・ミュージックの活動に参加。また、韓国の歴史、文化に通じ、近年はハングルによるラップやポエトリー・リーディングなどもこなすに至るが、これらは女優・黒田福美氏による影響がきっかけとなった。99年よりシーズ音学院にて山元彰子氏にピアノを師事。2000年「TATSUO BAND」結成。01年、麻倉未稀、庄野真代のステージにも参加。

写真：八久保 敬弘

●ソシエテ・コントル・レタ（バンドの由来について）

ソシエテ・コントル・レタとは、もともと、フランスの人類学者であるピエール・クラストルが著した本の書名だ。日本では『国家に抗する社会』として翻訳・出版されている書物。南米のインディオに関する調査を書いたものである。国家を形作ってしまうような権力の在り方を避け、それでも如何にして社会を成り立たせるか、というインディアンたちの「野生の思考」を浮き彫りにした。

ただ、よく誤解されるのだが、バンド名の意味合いとしては、「国家に抗する」というよりかは「国家をもたないようにする社会」の方が適当である。

グループとしてのソシエテは、ひとくちに言って、多様なリズムの実験場である。その素材は時に詩であり、数学であり、美術であり、ダンスでもある。そして、様々な地域に聞かれるリズムの息使いに耳を開いて、発見し、驚いていたい。

世界に息づくリズムは、底知れないほどに豊かである。

そう、リズムは所有され得ない。インディアンたちが土地を所有しようとしないのと同じように。土地はヒトのものであるのではなく、ヒトが土地に属するものだと彼らは言う。リズムとはヒトが属するものなのだ、と言い換えてみることは果たして可能だろうか。

およそヒトの世は迷宮の森だ。どこを分け入っても、行くあてもなければ、地図もない。にしても、樹々たちは風のそよぎを受けながら、ざわめいているだろう。葉は葉とずれ、軋みあい、それでもリズムを分有しようとしているだろう。

そのような思いを込めて、このグループをソシエテ・コントル・レタとした。（港 大尋）

※ソシエテ・コントル・レタ公式HPにてCD視聴可。

<http://webclub.kcom.ne.jp/ma/tatsuo>

design：HICOH